

あた、め、安樂あらしむるにより、綿の湯とも名り、惡血邪濕をとらかし、痼疾癩瘡を治するは、唯瀧の湯を第一とせり、又鷲の湯、脚氣の湯といふも故あるをや。

〔宗祇終焉記〕此暮より又わづらふ事さえかへりて、風さへくは、り日數へぬ、きさらぎの末つかたをこたりぬれど、都のあらまはしは打置ぬ、上野國草津と云湯に入て、駿河國に罷歸らん、のよしおもひ立ぬるといへば、宗祇老人、我も此國にしてかぎりを待侍れど、命だにあやにくにつれなれば、こ、らの人々のあはれびもさのみはいとはつして、又都に歸りのぼらんも物うし、美濃國にまゐるべありて、のこるよはひのかげかくし所にもと、たびくふりはへたる文あり、哀ともなひ侍れかし、富士をも今ひとたび見侍らんなどありしかば、うちすて國に歸らんもつみえがましくいなびがたくて、信濃路にかゝり、ちくま河の石ふみわたり、菅のあら野をまのぎて、廿六日といふに草津といふ所につきぬ、

〔北國紀行〕重陽の日、上州白井と云所にうつりぬ、○中是より棧路をつたひて、草津の温泉に二七日計入て、詞もつゝかぬ愚作などし、鎮守の明神に奉りし、○下

〔東路の津登〕きぬ川、中川などいふ大河ども洪水のよしいへば、こ、にいつとなくやすらはんも益なし、草津湯治遅く成ぬべし、さらば立歸りねと定まる、○中新田の庄に、大澤下總守宿所にして、草津湯治のまかなひなどに六七日になりぬ、○中大戸といふ所、海野三河守宿所に一宿して、九月十二日に草津へ著ぬ、同行あまたありしまで、馬人數多く、懇切の送りども成べし、廿一日、草津より大戸へ歸り、出侍りぬ、兼約とて一座興行、

時雨かは紅葉の中の山めぐり

〔漫游文草〕四、草津湯泉游記

余久抱烟霞之疾、自謂、非山水不可醫也、嘗聞、毛之草津有湯泉、能起廢有奇驗、欲一浴、此泉者久矣、偶